恰野集

卷中

土岐文庫
文庫17
W46
8

文庫 17
W46
8

昭和六十年二月一日
故善麿氏寄贈

D10185194928

被知恋　不被知人恋　不知人恋　恋不知程　不知身程恋
不知為方恋　占恋　恋卜　片恋　片思
片思恋　尋常片思　暁片思　互片思恋　思
思恋　恋思　互思　相思恋　不相思
思煩ノ恋　初疎後思　晝夜思恋　思昔恋　思出昔恋
思出恋　夕思出恋　觸夷思出恋　見家思出恋
思二世恋　分ノ思恋　思痩ス恋　忘恋　思出舊女恋
不忘恋　難忘恋　被忘恋　被忘人恋　欲忘恋
被忘後恋　忘久恋　恨恋　被忘恋人
忍ノ恨ル恋　乍恨忍恋　被忘恨恋　怨恋　怨恨恋
恨不言恋　人傳恨恋　不来恨恋　心中恨恋　恨言恋
夜恨恋　増恨ノ恋

披書恨恋　恨久恋　恨偽恋　互恨恋　被恨恋
恨身恋　恨人恋　恨世恋　恨前世恋　不恨恋
恨切恋　恨短夜恋　不誤被恨恋　欲絶恨恋　絶恨恋
恨後絶恋　絶恋　欲絶恋　変契絶恋　中絶恋
忍絶恋　未遇絶恋　絶後恋　絶久恋　絶経年恋
絶不忘恋　絶後恋人　顕後絶恋　絶後聞恋　絶後形見
憚人絶恋　耻身絶恋　絶不知恋　不絶恋　恋天象
恋地儀　嵐前恋人　恋風　恋雨　雨中恋
雨中来恋　霧中恋　雪中恋　雪中恋人　経日恋
経月恋　経年恋　経年同恋　恋月　月夜恋
月前恋　月前忍恋　対月恋人　月前待恋　寄月待人
月前逢恋　月前別恋　暁月別恋　月増恋　見月増恋
恋依月増　月前顕恋　月前遠恋　月前恨恋　四季恋人
立春恋　春恋　春朝恋　春夜恋　春増恋
春初恋　春見恋　春忍恋　春待恋　春逢恋
春変恋　春恨恋　春樹物恋　三月尽恋　春別恋
端午恋　夏忍恋　夏待恋　夏逢恋　夏恋
夏増恋　夏顕恋　夏悔恋　夏別恋
夏絶恋　秋恋　七夕恋　夏恨恋　夏奮恋
秋夕恋　秋夜恋　秋忍恋　秋暁恋　秋朝恋
秋切恋　秋待恋　秋夕待恋　秋初恋　秋増恋
秋顕恋　秋厭恋　秋稀恋　秋逢恋　秋別恋
秋奮恋　秋変恋

秋恨恋　暮秋恋　九月尽々恋　秋恋在野外　冬々恋
初冬恋　冬朝恋　冬々夕恋　冬々夜恋　冬々忍恋
冬待恋　冬別恋　冬々増恋　冬々切恋　冬々寒恋
冬恨恋　冬絶恋　歳暮恋　歳暮待恋　暁更恋
恋暁　兼厭暁恋　惜暁恋　暁欲帰恋　暁欲蛍恋
恋朝　朝恋　晝恋　夕恋　恋夕
暁恋　暁樹恋　暮恋　暮夕恋　暮恋故人
薄暮恋　夜恋　夜半恋　夜中恋　夜中思出恋
深夜恋　不通夜恋　終夜恋人　深夜帰恋　限一夜恋
恋昨今　恋山　暮山恋　深山恋　閑恋
潮路恋　隔關恋　逢坂関恋　行路恋　懐恋赴遠路

旅恋　旅夕恋　羇中恋　羇旅恋　羇中暁恋
旅宿恋　旅泊恋　河邊恋　恋海　海辺恋
海濱恋　海路恋　隔海路恋　湖邊恋　境外恋
故郷恋　水郷恋　山家恋　山家夕恋　山里恋
不觸宿他所恋　被制主君恋　思高恋　思貴人恋　思高人恋
恋不依人　称他人恋　被軽賤恋　恋賤人　恋下女
両方恋　思異人恋　等恋両人　嫉恋　老恋
老後恋　老後切恋　幼恋　艶女逢他人　移媒人恋
不憚自恋　被慰人恋　人傳恋　耻身恋　耻人恋
歎身恋　恋不離身　人恋我ヲ　恋命　懸命恋
欲代命恋　恋情　恋情　恋心　通心恋

不叶心恋　桑門恋
恋催無常　恋憂喜
恋色　恋香
夢中懸恋　夢後恋
面影恋　恋面影
無隙恋　難休恋
馬上恋　舟中恋
恋鏡　恋髮
恋帯　恋衣
恋弓　恋舟
補録雜物恋藁　恋紐

発道心恋　依恋入道心　恋愛道心
恋涙　涙川　恋聲
移香恋　恋夢　夢中逢恋
寝覚恋　假寐恋　獨寐恋
景恋　形見恋　恋形見
難き恋　遂難恋　恋長短
名所恋　恋餘波　恋終
恋枕　恋筵　恋床
恋琴　恋笛　恋鐘
恋扇　恋木　恋祈
恋細　恋秋　恋糸

恋漆　恋玉
恋仏　試恋
恋えちらす　憑夢恋
恋ぶま　たのみの浦

恋櫛　題神　恨神恋　悼人恋
報恋　無他恋　恋便
恋縄　ひとぶま　かく程づゝ
述懐恋　祝恋

恋中目四終

恋之部中

被知恋　丹後

不被知人恋　友則

秋　秋ちかの浦に今はたちうちぬる人のみるめは海士のみとなる

古　川のせゝにあひくるたぐれて人のしらぬ恋とする哉

後　家恋　美材

家恋とゝらぐれの茅ぬまもやゝ忍ぶ時ぞ哉

〃　ちぎれば家人しもはしらぬ中かはゆとい　愛之

恋とゝいとゝ名ぶこゝろぬいで家ぬ人のしらせん　〃

後拾遺　ちぎれる人をゝ世ぶこゝろ地獄ぬ人ぬ

金　我恋のこゝろ計ぬ笑ぶ出でいるぬ人にえゝまゝ

千　ちぎりかゝ世ぶおぬんかゝ加ぬられぬ家ぬ

〃　家恋ぬちぎりぬ奥のますぐ系ぬ家ぬ人ぬ

新　ちぎれぬぐゝぬのゝとぬ世ぶ恋をぬ人の袖ぬ笑ぶ

拾　恋ぬかぬ笑ぬ色とぬふちぬれぬぬ

京都帝国大学図書

不知人恋

恋不知程

勅 いつはりの浦にきこゆる白浪のしらじな君は我おもふとも　読人不知

〃 かくれぬにせきそめにけるわか紫深き思ひを知人となし　為顕母

代 説にならひ乱れんだと知らねども人のならひにたえぬなる　美以ね

勅 春日山朝たつ雲のおぼつかな知らぬ人にも恋ひわたるかな　万

六 出ぬれば知ねさへならぬ人ぞ知る知ねん人こそ知る人なりけれ　不知読人

古 しるしらぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ　〃

万 あら玉の年のをながくいひわたり我恋せんいのちしらずて　〃

六 家恋しりへとしらずなぐさめし逢とも限といふ許だに　躬恒

拾 海とのしらぬも稲かし家恋ぞ何にたとへて君にいはまし　読人不知

〃 りうへのはひに出つる逢ことの年月ながら待しらぬかな　貫之

〃 いつとても我恋やまん千早振わきまへしらぬ煙たゆとも　よみ人しらず

金 逢ふのいのちとならば浪の立ちねんものぞなき　雅定

〃 何ゆゑに年をふるとも恋ひわたる知らぬ命に年ぞつもる　顕綱

チ あはれとぞ思ふ年月と数ふる命や恋の限なるらん　章書

不知身程恋

不知為方恋

新

勅 我恋はいつへと限の色なるをたのみかりへとしらね色なる　通具

勅 逢までと草葉も此に露けくて泣来しのみのきて世知らず　前太政

代 恋しさの限りだにある世なりせば年へて物はおもはざらまし　光則

続 身のうさを思ひしらでや恋ひせましさはるべきほどに立ちねべき　家て

代 あさましやまくべきならず人しれぬ身の程しらぬ物思ふらん　隆樹

拾 恋しきを何につけてか慰めん夢だに見えず寝る夜なければ　順

チ 見るは皆忘れぬほどのそれならぬ身の程知らぬ心なりけり　忠良

〃 忘れずは浮世の中と思ふにも身をなぐさむる方ぞなき　法印式ア

勅 逢ことはなぐさめのはかなくばこそ忘れもすれと思ひ侘ぬる　為国

続 さ夜衣の妻とむすばぬものゆゑに世の思ひを残すこと世をやきさん　道綱

勅 世の中と浮名をとゞむる物なればみだれをこそしるべなりけれ　宗家

〃 いかならんことのはにかくかくて恋といふものならばこそ　雅保

代 慰むる方こそなけれ逢ふことはいつぞも嘆く恋のくるしさ　実定女

万 玉梓のかよひし道もたえぬれば妹にあはんと家にかへらん　よみ人しらず

恋下

忍恋

万
夕されはとこうちはらひ秋の夜にきまさぬ君をいつとかまたん　読人しらす

〃
月よみの門にも立ちうらしてり付さくやはしにゆふけとはまし　〃

〃
武蔵野にうらへかたやきまさてにものらぬ君が名うらに出にけり　〃

〃
ことたまのやそのちまたに夕けとふうらまさにのれ妹はあひよらん　〃

続
忍ひわひ山菅の根に物とへはかなしくはかなそ恋つゝき　親重

代
前に恋ゝの世桜のちりて恋つゝる人を松をの葉の　顕季

〃
おもひわひ心の松に年ことのちきりむすふくは深之らも　小侍従

後拾
来ぬを待ちて諫し物を井てに招むくる恋夕けるかな　読人しらす

万
わかこひすらん君をいまくは恋きつる人のとふまて　池主

古
来んとしにてやあらんあれはおにこひしき人を昔と忍ひけん　ふかき法師

〃
恋しとは人をとふとて山越のこゝろへするまて恋しきかな　〃

後
逢ふことをかくこゝにみゆる我身あらへき命にむかしは物を　〃

拾
人めのみ忍ふこゝろにてしられねは君に恋する物は袖かな　〃

〃
つらしとは思ふ物から恋しさのこゝろにかなはぬものかな　〃

〃
暮にのみこゝろなる恋せし人忘れすなかき人にあひぬるかな　〃

後拾
なかなかにあひ見ぬ人に恋すれる程もあらしを人にしらせん　赤染

詞
恋しさに忍ひしてやうつれなかなか恋しき人のなきかな　重之

〃
風をいたみ岩打波のおのれのみくたけて物を思ふころかな　重之

〃
いかならんことの折にかいはてしのひかねたる心を人にしらせむ　後恵

千
忍ひきれ恋せしかなとつゝむるわかれをあらくしとも　兼保

〃
人のうへと思はゝいかにいひもせんしらすおもひなるらん我　実定

〃
恋そめし人めつゝむにそこはかとなくしれしとも露はかなりなまし　大弐

〃
思ひわひさて後にしもつれなくはわれそ涙のしのひかねなむ　季経

〃
荒磯の岩にくたくる浪なれやつれなき人にかくるこゝろを　堀川

六
大かたに我を忍ひん人しかはかくしもこゝろはならさらまし　読人しらす

〃
陸奥のしのふの里と思ふるかなしみに恋のそてをうらみつるかな　〃

続
うつろはて住まぬことの思ひ返すのみになりにけるかなと　実国

月
忘れ人をいふへしとは思ひきや我こゝろをもつゝむなる説　堀川

片思

代 うたがひくるしき恋の
〃 夢にのみ見るかづらうつせみとなどいとはぬ人を思ふらんけさ
古 いつかは数にもとはぬ人を思ふ
〃 ひとしれぬ恋とは思ひどんとつけてはる涙ぞ
〃 人ごとする物思ひとが恋をなるまじとの人ぶりせず
〃 家ごとに我を恋ふらん人とだれともやうにとせぜんらん
後 つゆばかりくれぬ人のうれしき時しも浦きんとうもあるかうまう
〃 独のこの人なるまいかふかしてもうんかふ人を城一人
拾 恋するいらすきは物と知ずでく人を家分ふもだしてさざや
〃 我おごうさと思ぜうきんれもとぬ人を物うきしき
新 うれしきをだに家ごかいとふいたらでそをぞにはじんとふいん
〃 家中にうきを思ぐ人やもと今世ふ物うらいひわもせよ
古 ふもぬとものふとふてうらてうれだうもるぐ人をいぐうる
代 昔うう恋と強せぬ分うれどもはうきう人ふをなうふぐうう

家方
小野
後人ふ和
忠岑
古今後人
躬恒
ふ古後人
忠岑
後人ふ和
〃

恋思恋

尋恋恋

〃 君ふさえはうとうえん人をふ恋をうきはと知せん
〃 さもとうれのひとうるれど家恋をもとぞふいてきうぞや
古 人ふれぬふものもをひぐ人れ我歌さぞのれのこぞたる
後 浪ふくふふうるれぞはうきうんをさとはうつぬはふぞをうる
千 ふふぞとふるうんをさとはうつぬはふぞをうる
新 逢えとはうぬはうれのをはをはせるとてとはの歌くらん
〃 世とをふ強ずとふるる涙ふふ人をふとうぬ歌ふ
古 うこ恋とかうえ知てもものをれ強ぞうふをぞはふの日を
代 ひとうぬるふを枕ぞひふかふうてるいぬうて義よ一ぬうん
〃 ぬうれふふんとうてふふ義にをこぬを恋うをうさ物ふ
〃 ふとふふ人をふくとを探ものうふるまでなうんとぞふ
新 天ものとをふぬうふの月うれぞうはふ人とぞ恋ふうう寝ふ
古 家をふふ人とふをぬむふふふ我ふふ人のうれをふをはぬ
後 ふふ人ふうをぬ人の男ふ人ふうれん思ひふるぞく

基房
経信
男之
後人ふ和
長房
大輔
後宋
ふ後人後
〃
西行法師
忠岑
後人ふ古
〃
〃

暁恋思

互片思恋

思

思恋

六 世の人のなさけにまよふ心しられてもまよふ君のまに　読人不知

後 いつの庭かげまでおもはん君が為おもふこころのみさくらなり　是則

拾 我ごとく物思ふ人はいにしへも今行末もあらじとぞ思ふ　よみ人しらず

新 いかにしていかにこの世にありへばかしばしも物を思はざるべき　和泉式部

新 消えもせぬ色のものにみえてものをおもはずもがな　定家

古 広瀬川袖つくばかり浅きをや心ふかめて我思へらむ　読人不知

古 汲かへわかぬ思ひのはてもしられんせ人りはくなたる　元方

後 船なく見え川舟の見えずの水うきて思ひのはてもしられ　読人不知

後 浅からぬ思ひのきゆる物ならばいとくもりなき月ぞ見ゆべき　忠岑

のえい
絶えずしておもひをする沖の浪まゆくへもしらぬおもひかな　よみ人しらず

家ごとや君をこふ浪白露もまてとねても袖ぞかわかね

思ひやる心はかよふ身をかへず一日にちたび君をこそまて　千古

数ならぬ思ひと君に見えしよりわがみのほどをこそしれ　読人不知

拾 夢にだにあふと見えこそ夜はすがらこひつつあかす人もなきかな

あるや君恋しきはいかにはかるらんわがかくばかりなげく思ふころぞ

何處にかもの神ぞ知らん君が為なげくなげきのくさまだしげれ

こえてそうけひと恋ふらん時にこそ人を思ひのやまんにかせん　和泉式部

後拾 さまざまに思ふ心はあるものをおしひたすらにぬるる袖かな　堀川右

うしとてもはらふに思ひぞくされぬ恋もうらみし物にぞありける　道信

思ふてふこといひてぞ思ひける人も思ひわびてぞ物は思はまし　読人不知

金 かつすらんめのかりさえてわかくさまでもおもふなり

千 歎きわび憂き身をしるとえすぐしき君ゆゑ物を思ふとおもへば　季通

袖の浮えん人にとふまでなるをとふに思ひを恋しき君まで　式子内

絶えぬべく只一すぢに思ひ恋しきにまよふ家や何なり　前太政

いつはりやおもふ人のまことあるべきをこれぞかれたえせまし物を　河内

新 さびしくに君を恋ひても人にいはで称をのみぞなく　清輔

絶えるひとすじさかとすみ白浪のまなく物思ふ我身之から　京明

恋思

古 君ふらむ日ひさしくなりぬ世の中の人をも恋ふる恋といふらん　忠岑

〃 忘るらめ君ぞふけゆく秋の月　業平

〃 人をいとふくもゐにとぶ雁の　躬恒

〃 つれなきをふらぬ人のまゆ毛をもく抱きてもの思ふ　宮内卿

〃 かりぐるんの間かたをもく小かどう乱て抱きもひする　伊忠

〃 家恋をつゆ知ぬすり衣人こそしらぬ袖ぐらふ　樊色

千 恋しとも又はしらぬ人のいづまを出ふ小雪つゝ降　鎌倉右大臣

新 恋とて同人のかどをもるるもん抱き者の歌ひとぞ　俊光

雑 思ひよりの限者ふ抱とはの中やの抱ちもるまで　西行

〃 分ひとをも人ひとをもふかとしらずぬを抱れ　惟宗

代 恋しかどこれるまもせさにぐる命計小抱きるる　為秋

新 我を思ひ君を思ひぐる秋ひ秋をもとをふ風の音ぞ分ふ　藤女

代 いまこそしらまはれらのをとめる花いと家計ふひいろんかと　和泉式部

互思

私思恋

不相思

思煩恋

〃 いとぐせん君ふかどをもとふ分ふかもの限ひ命ひすい　光俊

〃 袖をふひ恋ひとをふ中ひ家ひそ人袖　長時

〃 世の中いのすう川ふとかひ君ふそ人袖　小町

古 君いとを思ひ沢ひ家ひ我と我とを中し強ずも

後 ひとうらぶいかどんふつうら袖ひ君ひ人をもんな　読人不知

古 ちりぬどちひとりくが恋しかだ生れふをひ藤衣きをず　〃

万 紅の裾引ふもを中ふちきて家やうよん君やきまさん　〃

古 君やらん家やゆんのいざこひふ抱の板戸ふ沢祝ふ　〃

拾 くれうとふ小恋きい家さんふ君ふ見ふ　〃

後拾 我といふつを形く恋ん抱きん人こそ忘れがたれ　和泉式部

詞 いくゆりはらと人をうくま世ひうめひがう恋うるん　〃

〃 忘ひとおもんだいとぐ恋ひまいいだれうこ家がんひする袖　読人不知

千 逢ことを分とうくて抱ひふ紙論ひ袖ひ抱ひき　俊宗

野 生に世の抱まね歌ひ強ざうぞ伝ふ命武うひ抱ひ袖　通信

初逢後思

晝夜思恋

新 いはでたゞいはぬ細にさはがれてかひもなき人にあはぬころかな　宗尊

〃 わがこひをいはで知するちかしらぬもさすがにわびて世をや社あれ　清輔

〃 やましたに思ひわびぬるを人にやるさかねことの葉ぞかし　通経

六 わが人のせこりざ網の網引にかくひくなり　よみ人しらず

〃 恋もせんとすれる川の八橋のくもでにかけてこころかな

〃 こひしさの神にとひても嘆くとてわかれねなほ恋ぞ

〃 夏山にまだはるけきふえぬとゆきかよふ恋のしげきにやる　貫之

月 ねぬるよもさめてあはれひとりの衣をうつ頃てかへすはかなひ　定政

〃 恋ひしとはもとひはすにうつりぬる浪の川のすゞむなりけり　覚昭

代 おのづからなでしこやる夜と恋にまかする人にかとひてや　信実

〃 いかなる身のなのちらきらのをゆくにかりつ身とて恋しき人　為氏

〃 恋ひてぞおもほえぬやと歎くらん人の恋する夜もあらぬ　讃岐

千 と夜に恋ひつといふはねまれどおもえんのかゝると思ひて

古 わがまたでは蝶のかよふるはすのまゝ忘れ　読人不知

思背恋

〃 花ぞまれ人はまねつくらぬ露のおくとはよまねといふさだめん　宗宗

〃 おもはもと涙袖にせてもるそぬすむしてはまくもとてながきうなかれ　前世〇

拾 夏山に人の心をなくさえつまぞ袖にて覚えてもねを袖の思へ　読人不知

詞 みかき守衛士のたく火のよるはもえて昼は消えつゝ物をこそ思へ　能宣

六 思ひわびよまなきの涙にかゝる夜をかすみにけれぬ袖の　よみ人しらず

〃 ひるはきえよるはもえてうかぶかくる蛍も蝶も我が身なりけり　貫之

月 昼もおもひよるは夜歎の涙ねかゝとぬねるも夢もやむ　定家

代 ひるは蝶よるは蛍と身をかへて鳴き声してはきえぬすかな　定家

古 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　宗平

拾 いにしへを夜にかへしと思へばわがあはれなる涙かな　五暦(?)

新拾 来ぬ人を月の夜の月くの夜明ぐの空にこひて　為家

千 あかざりし秋のわかれと待ちし秋のくれのかなしとは思ひき　大補

新 里はあれぬ尾上の宮のおのづから待ちこし宵も昔なりけり　太上天皇

思出昔恋

思出恋

後人ふる和　光敬
俊家　雅室
長慶人後
〃
と忠
俊直
読人しらず
〃
俊宗女
大武
ふ雪
宗治入道

子級まで成る春の夕ぐれ
〃 おもひ出でぬ人でしらぬ
代 昔みし枕中もふるきそ更ふ袖なれてはしらぬ
〃 むかし多張ば数もあまべば紙しとやくらわ秋の小袖
〃 いかにせん松で高き思ひの心の秋さ来る日まれど
後 古一の枕中もふるかふさ〜ぐむ袖は波ぬりる
拾 人とこぬふふ昔〜君とのとれせぬつぎくをそで高さ
月 ものとなど昔ぬ〜ふ分にそひて家のこ年も若ふるふ
後 ふ高ときまくでかりきかれ分のやまとあでこ変やられる
後拾 おひ出でとふことをもれとまりたきふ恋ぬ今ぬせで
金 にもてとおひで出るふ人をわで幾月おぐりけん
初 ゆ〜でも神も変人むさふふり出ぬ秋えは秋で高〜き
後 と交ふ伊ふ袖をぬ〜さ海〜昔中も〜ふ思ひ出ずも
代 ふとも〜で見ふん変をふふ〜ふとれをふふとといで高ふ

白思出恋

鶴事思出恋

見る思出恋

思出恋女恋

思二世恋

〃 おひ出ることはうてふかだれそそで見〜ぬ袖のゆえ　宣旨
〃 うれ拍とおひで出る立四ぬ袖とすくふえ〜袖のつれも　後鳥
後 みし変ぬ松をひ出る立身ふ変ぬ袖をふる八波ぬふり　い世
代 四されで萩吹変すふ風ぬ高ふふりに高でおひ出ふも　家長
金 と人ぬ仏をこ橋の山ぬでを色ふ〜ふふ〜ふ　甲賀
後 うれ分をだ伊ふ仏ぬおひ出ん高ることぬふふふ〜ふ　安義
初 敢ぬとてふの変ふ〜ふ〜ふ〜ふ昔ぬ庭の敢ふふ　保季
ふ 忘れふ人をで変ふを江ふる若ぬ春ふふひ出ぬふ　後人ふ和
後 ふ三ふ高ぬとふ知ふふふまで〜ふ計で分さは高〜き　変方
拾 伊のすふふぬ家分ふふと恨ふん氏をふぬぬふまでと忘れ　ふ〜ふふ
〃 いで〜ふふふ仏を顧めて後ぬ世までふふ拾をふぬで　〃
千 高後ふ後ぬ川ふ分をふ〜ん氏世ふで逢せふやと　家雅
〃 君ふ〜ふふの星を後ふ〜ふ氏世ふ〜ふと逢せふ〜ふで　後岐
代 ふひ〜やふんをふ人をいふふ〜ふふふ見えやえを　忠良

長中八

今思恋

代月 身をしりて又此世にかへて命をぞ家にとゞめんことさへぞうき　高倉
しらぬ人をまだ見ぬに後の世に恋やわたらね友となるべき　六条
後 わかれての後ひと村にうつしうど迄出て君を思ひそめてよ　兼好
〃 思ひてぬるよをぞ待つつわびたる君にわかれはてぞうけれ　寛秋△
拾 わすれたらしきものかぞの諸人の君をも恨み思ひするかな　尾張
千 誰なれや何くれにみえんとまちみえし月影は物思ふらで　よ美人後
六 恋ひそめしにかれにけりわかれける人よ何せん妹がりゆかで　貞文
〃 石しきに何まつの袖さへ見しかど今まで思ひの火ぞ燃えよ　読人不知

思痩恋

〃 家門のいさら小川のましみづてぞ思ふ君独せむ　読人不知
〃 思ひて絶ゆとしらかなまゝこばら君独せべし思ひつゝ思はん
万 ひとへのみ妹が結びし帯をすら三重結ぶべく我身はなりぬ　家持
〃 物ごとに我身はならぬものすがたまにうつていかし子なり
〃 夕ぐれの秋暁寒の物ごとに家身はならぬ面影ひとつ　読人不知
〃 何ならん目へも門ゆかん思ひそよ恋ふる涙わすらるゝ

忘恋

〃 物ごとに我身はなぬかぎりひのかれのにうつていかし子なれよ　仲顕
古 恋すまじ家身をかぐと其ほどさとて人にそへぬ恋なれば
千 人さへ身にもわが涙あはれを恋を染めつゝるなり　紀顕△
〃 人はさしもいかにせん見せぬ君よなれる染めと　俊頼
金 浅ましやこは何するのさまざまと恋せよとて生れけん身を
六 されど川為せかつる涙に手がおきてもれぞやせ袖波れ　よ美人後
〃 とつれは見しき世をら恋すまで家路ゆかぬ鏡夕とり
〃 さらぬの樋の下草やきつれど世と共に何ぞ我身を
〃 君こふと夜はすぞこの世のこのせ川はやせ袖ぞた
代 人とはでいつかさびしきまゝ袖に涙にまかるすがたぞ　和泉式部
後 植てける家は忘れで何ごし人に見しぶる花にぞ見る　大輔の
拾 さし袖はねらんとはゞからぬ忘れずと君にいつ人ならぬ　いせ
〃 逢ふまでは我ともわらず袖みとさへも思はん忘れてゆと　忠依
後拾 忘れぬといひける中は忘れからすれんと袖いつぞらる　右命△

歎忘恋

法橋 忘れずんそれも恨ずゝ思へこそ逸こゝろとぞ思ひもこそ　西行法師
〃 とどめるゝ思ひんと契りしかれんとそれ命なりける　為家
〃 忘れなと忘れじと祈たのめる事やといひ置そ契　後鳥羽院
〃 恋ねは命もたのもしかりけるこゝろいかゝ思ふらんあるを年　読人しらず
〃 いまだまの光もまふと忘れじといひしと人のことかはでなる　小町
〃 忘るゝ人を知れば忘るゝこゝろのうたに分いとゝ拾忘れして　紀貫之
〃 いふて忘ることをうらひそんとねる人はやとひそ知ま　紀貫之
〃 とはねすと恨ざるもんせ中小象独する拾忘れうた　藤原
〃 うれしとゝ思ぶこそ忘れうゝ中まくゝと忘りれ　三河
〃 てしまれる君をもさのもまふふひいとゝ忘といふん　長実卿
〃 家せふこゝろでゝ忘るゝいとまのゝ思ひもかゆん忘れ貝　大伴郎女
〃 いとまのゝ拾ひよゆん泣れえの岸からるゝ忘れ貝　読人しらず
〃 後ぬれで忘れて忘れんと思ゝ拾で人恋れ　興風
〃 忘れうんと思ふかゆるゝ忘れうんだと後れうる　良実

忘恋

金 とゝろ思ひ心ゝうゝ先ゝとゝ恋れてゝるゝぎうそ　とまりの内侍
〃 後ぬれで忘れて忘れんと思ゝ思ひ忘れる後ゝ　〃
〃 忘れる人先ゝ泣ふ立家源忘れゝ忘れる　伊勢
〃 忘れもれんと思ふんの恋てきいうれもうゝね拾ふでもゝる　滋春
〃 忘れんとゝいと思ふ時ふこそ忘れ恋ふ悩る拾忘れすま　読人しらず
〃 忘れそ花ぞのの笑ふゝふいゝんとゝすま先や　躬恒
〃 秋の田の種のうゝとてゝすゝ稲葉の光れまふ歌や忘れ　読人しらず
〃 忘れる時しるんで萬てゝろの忘ひ恋れて称せれてぞ　〃
〃 妹の田のかふこそ人を恋ぶゝ忘れんゝ忘れ　〃
法 うゝふこそ神れずゝきうゝときれゝの義といゝ　〃
橋 絶忘れきゝふせたる忘れうゝずやわゝまゝ忘れ忘れん　〃
〃 萬のやれらそわぶゝ泣れ國のあゝゝゆゝと忘れゝ　為実
〃 忘れうふねる秋もあゝて忘ねるゝれ手枕いつゝ忘れ　長綱

雜恋

六 ちくとくとこゝろにくれぬれば秋にふかくなる中黒しるのさ　後人ふる
〃 うとぞかがくふかゆる袖なれば　同
〃 ゆくぐらの落くるみれば波まふと人をたのむ歌ゆゑ　同
〃 ちくとくとくれるんとてそこまでぶそぐひれくこゝろ増れ　同
〃 たんじと数〳〵袖を年ごとかゝるんとうぐ〳〵かさみ　同
代 うひとれまふ身をいるぐつふかすれいうぐたとられぬれ　宋助
古 たんれんとこゝろのちくこゝろふかなしこゝろかなぞ恋しき　後人ふる
後 我君にるうひとりこゝろをつそる中に恋ふしわるゝぐ　長谷雄
〃 しとさこゝろふたひむぐとあぐるを恋きかこそたれ流ぬれ　左大臣
拾 たゝる時〳〵あるれぐ蓮の恋とくすくぐ人に恋きこ　要之
後拾 恋てさしうきこふまだる袖あるぐ二度と君をこゝまる　大武
〃 中とかうるとしまふやとふせぐたる袖かぬとたかまる　いろは歌
新 絶恋の恋たゝ強てあきせふわるゝぐせしき　元長
〃 ちくとくとこゝろふ袖ちくこゝろ強ぬんあるこゝ　家忠

雜恋

六 たゝんねぬぐとはこゝろへきこゝろへ恨とおもふ袖ちくこゝ　後人ふる
閑 清ち國のあぐくゆゞたゝれぐ恋ぐくれたりにあれん　要之
代 松ふやとぐまふ響のすれ京たひすゝ恋ぐ袖ふれ　世宗
閑 いゝあ一筋のゆゞゝあぐくんぬ恋あ袖をまぐぐゝ加数　後光
閑 ちくくとたんずふひん麻ふあるゝのふくまいの逢せるゝと　順
後 つ恋あさとふひくぐ袋ぬあれどゝ恋といつぐ人とたる恋　信宗
古 たゝふくんすゝゝるとたとゝ人のんり義へおゝふ義　宗于
閑 たゝふくあふとゝ絶とたひたとれた人のたゝゝ也ゝり　紀貫之
拾 ゝすゝゝ身をだたゝず響ひそゝ人代命乃ちくくゝゝふ　右京
後拾 ゝ人ふたんれてゝる袖ふこゝ身ちゝる百ハたとたゝまね　和泉式ア
閑 たゝゝゝ身たまふたりゝ人代んぐゝゝまんゝふ　紫宋書
金 人たいさたりゝすゝんたんれてとたれぬゝ袖ちきこんたゝすゝ恋　後人ふる
新 たゝゝ人ゝゝ中と歌ふたゝ恋きこゝたゝすゝ加ぐ　同
閑 ゝたゝゝゝ身ゝとゝたゝと袖あぐゝたひゝわゝぬゝ後ゝたゝ　清少納言

強忘人恋

同　はるとても浪かいそんとりて人をたのみなくよ　左衛門督
同　今とりかへしてとはいまは身をそこの人をたのみことばかなしよ　小式部
不　こひしのびて浪をうつ人は身のまゝにあふ命なりけれど　落窪
同　数しらぬ浪をかこえ数しらんだ家もたれまゝうだ　太上天皇
新　世はなかるもはかなかぬ夏かぞ浦なる稲ばでうる数せーまか　定家
同　夏身こそはかぬとなれ世をどるれたゞき人かたれそうたるうち　宗家
同　むせびたもだれ石のうらやかあたとそこねしこれ焼も　紙屋
強　今はたゞ人をたのみそれとそ君かあるひそまもかれ　海面
同　たのみ身かえ人のうらんしかるあるきとそかあるとと　読人しらず
代　たのんだともかたのみあるひとそ独は拙をたのんだとれ　小宰相
同　たゝ人を浪新きしかねをとめたきあれ拙は人たち家　義経
同　たひ出るひえあれを見し数拙をたのんだゞまれ　定家
同　身を拙て人は命を拙むとをし拙のおぼえやいとん　小大君
強　君のうらんたれ見えひろむれうあれ拙は身のうらん

強忘恋

強忘恋人
被忘後恋
忘久恋
恨恋

同　いそ我人をたすけんたのみ人えくは意しをまれ　二条院
強　たのみ数身はうをはたのんたとすると人はけたとれぬる　宰相
初　浦奥かるとしるあるたのみ川のそまきたぶかれそーれ　左衛門
強　とゝやおもしかんで深ぬるすると人をうく無用の浦の浪ゆ　読人しらず
初　いかるかりけそやあかるかること人をたれかるを　和泉式部
古　ひとるを嵯かつるを白をたのんたをあきの人のたのん　小侍従
同　秋をの吹うるをたくずの家は恨ても和らわきうれ　忠峯
後　世の中はうたをたべても和をたのうをうの数を恨りでうをたれる　久文
同　たのみの泡と浦ある身はわをたのうもるれ数あるたる　読人しらず
同　たのんたるをたのんのあるうせばかかは君をうをみーとせん　枇杷左
同　恨はれどうをたをたのんたるをとをたかたのんずがかはたをあるうん　読人しらず
雅　たれぬの庵のたのんうわきいかをとをたをあるうん　摂政
金　たのんたをたのんかをたのいたれるいたんうむと人はかーをむ　読人しらず
代　うをみーとたのんをたとすをばをとのんを浦をぬるうを　法性寺入道

怨恋

怨恨恋

思恨恋

怨恨思恋

雑恋恨恋

仙才恨恋

恨言恋

恨不言恋

人傳恨恋　六　漢人伝
不来恨恋　結　安忠
夜恨恋　詞　慰むるうとあくるを待ずして　金　ふるもの也すまれうるみて　野　おぬ人をまつとハあくて　後　見しぞふうらゝ　代　とぞる恨おもてるの家となるひと　結　見とる響の行ゝさすがの　代　色かるゝ　旧　すたきゝん　後拾　うるの系　代　そ　旧　とゝとゝ

増恨恋　光源氏
披書恨恋　嘆
恨久恋　伯春
久恨恋　哭之
　　面白
　　長谷雄
　　紀任
　　和泉式部
　　象数

恨絶恋　代　牧めずハとゝねとさふ　旧　絶とつすもねまでも　結　ゝ　月　君と我おもゝ　代　とハさゝ　古　響のすむ里も　代　身をつゝ　後　いとの海も響のまそ　旧　ゝ　旧　ゝ　旧　君を牧ゝ　旧　ぬる君ハ　後拾　ゝ

互恨恋　左京四位
　　逢祐
　　後人
　　宗逢
　　実國
　　小町
　　後人
　　英明
　　いせ
　　後人
　　同
　　源大夫
　　後人
　　えゝ

披恨恋
恨身恋

恨人恋

代　分をうとおもひ知ねる袖まらべはてきんをかかうらみ奉　侍従
同　はてしてんのまこかに恨てもなほ袖のは　弾正
同　うれしうで人もしらぬ袖をぬまのらづらとおもひなれ　安芸
同　世こそ程なかりしなれ　和泉式部
同　恋ゆえはてきもせずかにて世なる人をうといぐ恨ぬ　堀川女御
月　詠をかんうで恨ぬうらをば思ふ人をうとみまーやと　後人小西
拾　大ろの家分ひとろのうれうふ恨ぐこの世ぬ恨なる恨　斐ろく
詞　家世めかはしき人をばなまぐ何の恨をもやうきく行心　伊勢
代　恨ろ恨ぐつ世の中か恋てみことを恨ぐ先ん　藤然
同　我恋ぬ恨ましうをおもてこひをぬ世をうらん　西宗
同　かく計はもおき人を同じ世かせれあひるるまきぐうき　牧政
う　袖をぐうらぬ人をも袖を恨ぬるる分のちぎられ　為信
同　色ゆ告さぐれ青の袖ぐとをんねうう涙すきられ　和泉式部
同　うらるる世ぬ袖をふかゆはきいとのいろかも　為時

恨世恋

恨余世恋

不恨恋

ぬ　きぬゆ恨ぬるるのうける袖をうれ色をうれ世ぬをはきうれ　忠岳
後拾　夢の○ぬのうれ分の袖と知ぬ世ば恨れ袖ゆ恨ぬ世ぬ　公国
う　ひくすふ恨うゆせぐ先ぬ世ふ逢ぬぐこそい袖ぐうらるわ　家通
物　うらみぐか難波のうふか恋煙ひうぬ世わぬりか火　頼孝
同　恋ぬのふるれのぬぐうぬ分をゆうらみ色　大和
代　うとをゆのうれ人を恨むぐよとうらとぐかうれ人の色るる分をゆうらみ色　実方
後　さぐれのいきまふこれ恨ぐぐきうれ恋ぬるゆ人のとぐへ　堀川
月　うれ人を恨うんうれうれ人計あすを後ぐよつぐ分ぬ○ぐ　俊秀
代　恨ろびとはあ人をのうれ袖ぬ恋ぬ恋ぬ袖ぬ家いのちる　宗助
後　袖ぬをはあ人をのうれ袖ぬ恋ぬ恋ぬ袖ぬ家いのちる　言経
後　つう袖ぬいをぐきうれの袖ぬ恋ぬ恋ぬ袖ぬ家いのちる　長雄
後　色るとはうれうみぐうれんは袖ぬをとうれの色ひをみぐず　人麻呂
拾　ゆうづうのうきんをぬぐうれうみうれぬる袖ふぐるる　同
野　大淀のまつはうくふううえのうゆ袖ぬる袖ふ　同

不誤被恨恋

恨切恋

恨短夜恋

欲絶恨恋　　姉太政

絶恨恋　　同坊内侍

恨後絶恋　　土佐人

絶恋　　参議雅経

後　松山ふかくきあがらんとおもひ
後拾　繁しかのらぬほどまでとあこがれ
古　ちぎりの歌ありけるを
後　忘れぬといひかはしてのちまたのちに
代　かたがたのなきをへだてし人の
千　恨ずはなれぬ人とはあるまじ
古　逢ことのたのもしかりしかばこそ
同　思ひながらにたえぬ恋なれ
同　つれなくなる時さへ恋しきは
後　すがたをかへぬ人の心ぞ
後拾　ちぎりとぶかいなで絶なげくらんの
同　逢ことをなにしきこと
詞　うきながらすがふ恋の
千　絶あれしこうく中川せばしてそれかをかい後せけり

同　忘れぬをたゞ逢ことの絶なげくらんの
動　絶ぬまで今いとはをたゞ
同　逢ことをとゝ恨りとたゞ
同　いふきん今こそのの
氏　年ごろ絶ぬるのの
同　逢ことのあまさかなしき人の
同　人にいまを恨りとぬれぬ
代　絶とかの人をうらみ
同　忘れてをかるる面のか
同　さくらのいとをるをかく
同　ちぎりの川あがれてとも
同　命をも恨をとゝ
同　とゝまつねでのちぎりを

約通
強伝母
美子
不知後人
大輔
土佐人
同
同
昔物語
知家
前出
範宣
雅経
経貞

古今　をとこねはなれて女の濱まやへ人のもとへまかりける　中將
同　ひとりぬるあさとうらむるあけぬとはいかにとりてかはなれぬるとよめる　讀人しらず
後　さとりのをかすがるるあさとりはなれぬとこそ
同　孫にうるはとはいとをうるさとりのをかすがるるはなれぬるさま
同　はるとやいひそめまゝにあるの人かんえちやうとのみを　同
拾　恨りあくらんあるべきれ拾ひてうらもなきかすみやゝ孫うん　同
千　うらもなし命計はあるべうらもなきかすみ中ゝ出えぬ思きるあ　大武
同　はなれきかいそで孫あんとうらもなきそ逢ぬさるねの思ひ　李絶
新　はさし物の袖中をうるそはなれ一筆字の文ハ振うの　九条太
同　思川のいまさとるあをはなれ孫ねべくのそえゆるんを　中將女
同　逢ふをもの成ふする身わわんをゆるをいでゝ恋とうるねを　伊勢
後　孫あんとうらもんかきれるれるべくうるを　歌重
同　逢ふ成とい恨りとうらもかをあをかすみ孫ねべきうる　牧猫
古　ぶりというらもはうらもうすがるはなれぬまそ孫ねるる　ふる新撰古

愛契絶恋
中絶恋

恋絶恋
来遇絶恋
絶後恋

代　はるきかいうらい孫あんとうらもかるねはいかにとう　忠岑
金　命をしらうそ契しゆるいねるはるをそゆる　文原ハ
後　あづまうらかいはるなどいかるねる身とハいかにうら　讀人しらず
同　をそあづうやまんをず逢しのハ今ちをそうの孫ま　同
拾　いちはなるき拾ぞうきのをいちあのいれかのをそえまを　同
後　世の中かあづる恋の俤まい逢をの後かわいるねをうら　同
新　はうをいをいでい岩はうる逢ぬまぬるをゆるいを　上総
金　うを孫をを拾ひ一始るをさうかのをいかんかうをいとうかる　美濃
同　待うをのをうをを拾と数うんうをを孫をとをうるる身を　越中
千　一をびいうをい孫かを世の中をいをいをいをすをきをのをを　ゝ任
野　吹風かはうををとうんをうかの通ひをハをかををを　左強母
同　拾ふるの数えををかををををれ人いうをををを思ひん　素性ハ
続　ことのはを孫をををををををををををををををををををを　教良女
月　歌をうねうをを恋ををををををををををををををををををを　観塞

絶久恋

古 忘らるゝ身をうらむる中絶て人のこゝろぞ年ぞへにける　讀人不知

千 人しれず結びそめてし若草の花の盛も過やしぬらん　隆信

同 一夜とてよがれし床のさ莚にやがても塵の積りぬるかな　讃岐

新 君こそは袖にくだけて思ひきや絶て久しき蓬の露のかごとを　恵光

同 うつゝともゆめともなしに渡す岩橋の絶て中となりやそなん　雅宣

物 葦のねの短き枕はなかなかにあだなる行のためにうきは昔　いはひ

六 ともすればわすれぬ人を思ひ出てなかなか年のへぬれど　不知讀人

続 今更にいひなしそらに染られし池のつらゝは昔のまゝにて　為忠

絶経年恋

代 うらむるもまたいかならんうきねぬる夜の袖の涙にて　聖武

同 かるかやのみだれにかはる葦のねのよにもかくれて年ぞへにける　近衛

同 まつほどもいかにかはらぬ人をうらみてもおもひはてなん　近院

後 たえずして幾世へぬらん年月のうつりしはしのおもひなる　土御門

同 思ひわびいかゞやすらんあさましくなどかの年もおぼえて　同

同 なにとしてかくや妹なんあらしふくなかのまどろむ年かへる　同

絶不忘恋

物 同じ世に程なく逢てし月の前からかはらぬ心ありけれ　季保

古 忘るなとあそびしあとのなくなるを我身を恨ねとこそ　読人不知

千 うしてねにもあかぬ見し人をこそ此世にはたえそむや恋しき　相模

六 思ひ出る秋のそらなるうちなびくきえしゆくすゑ　上陸人

絶後恋人

千 うたゝ人を恨しといふもまた夢のかよひぢぞ絶　堀川

六 たのまじとおもふ我のなきよりもいまはかはりて　堀河

続 わすれてし人をば夢にみるべしといひそめし心ぞなき　ふしみ

六 袖の上のかはらぬ人にまだ知らぬ昔の人の今はなき　同

題後絶恋

後 君なくて恋しき人のこよひにはまだ来ぬなれども　同

六 年をへて忘れがたき人のことばとめぞ待つらる　いせ

絶後聞恋

古 聞えこそ今はあらはれなくて其上に待ちやらで　読人不知

同 いまはとてかくすとものはなれしを待ちあはせ歌　読人不知

絶後恥見

千 かくも恥見あるらむ昔を聞なほりき思ひ合せて　近院

物 今はとて思ひしまゝの名残ぞ恥ぐさの今のあはれなる　忠家

月

[illegible]

憚人絶恋　春友
恥身絶恋　[illegible]人後　左近
絶ふる恋恋　[illegible]
ふる涙恋　[illegible]
恋元象　[illegible]

恋地儀
嵐吹く恋人
恋風
恋雨

面中恋

雨中来恋

霧中恋

雪中恋

雪中恋人

絶日恋

経夕恋

逢年恋

代 逢日の恋をまつより時雨ふる袖のうへにぞ
医 月かげは消なんとすれど色ぬれぬ
区 袖のうへにぞ
代 まくれば袖に置るの面をぞ
同 面をたにぬらすとなん人ぞ
万 笑むくれあるのの山ぶかるる
拾 秋雲のたれぬ
万 ものを雲の
同 雨袖かぬれ
医 しぐれぬ
同 我恋
同 仙雲
拾 ものとは
六 ものをとは

惟成
惟平女
長能
良房
拾遺女房
後人ふる
同
家持
ふる作者
同
同
道綱
天暦御製
後人ふる

金 ぬれとぞ日せる又月百の袖のぬれ
六 月の袖の濡てぞ
万 ぬれぬ
同 袖の枕をまきて
同 ぬれぬ
同 ぬれぬ
古 ぬれぬ
後 ぬれぬ
同 ぬれぬ
同 ぬれぬ
自 ぬれぬ
六 ぬれぬ
同 ぬれぬ

肥後
後人ふる
家持
後人ふる
同
同
新拾
元家紀美女
伊尹
右衛門
後人
右大臣
後人ふる
恵子
兼盛

六 年月は立てとまらぬ色なれど山もゆるがぬ色見えず

同 たとへしとこだにたとへ花紙をひきのばすとも歌意

代 なほたとふるこひしさ今するごとかるるつれなき

同 人をんずるこんもるかの松やまつ知るかぬ

詞 とせやとかえるつる年月はそれどころなせず

古 松かねのもとに拾ひ人なの家袖かなどる月さへぬるるかな

拾 さやふかとえるまで月と我とで涙かこるわびおかる

野 袖をぬる波やそふかくまん光をえる袖の月かげ

同 文科のなどうかかの四月とかぐらるれ

代 結人もこねかの祝ねの月影をんかもわびぬ光れそう

同 ねやかくるとかるとの月の若るれをかまぬれとこの袖

同 方をもめぐ袖をとぞうこ夜もの立ぬの月もいとそねを

古 月をかいこねの人まるる花をうるまとうもん袖をうもん

後 秋のとの月の光い袖をんどの人もめくまもてうきず

読人しらず 順 京極為家 為尚 一條院 伊勢 中務 少将 美濃 藤原定家朝臣 為氏 同

月夜恋

身分恋

同 袖をのうとびのままにいきあはせて月を色といそぐ

動 逢ことを光のあねかぬるとの人あの月袖ぬぬをひとなるとき

野 とまれ為きわしとの人をこいひ光をと月をやつ袖をるれ

代 こいひあまりあかるる光とかまるの月さ人為をいとひるかる

同 月をかふとまねの人まとといとひそもこするさこを袖をざらん

同 あきこるる袖かをいでを若すぐよくるかるねの秋をの月

古 月をとうの秋ようとの人かの光やをこをとうの袖をなるとの

千 人をの月ゆをとやを為をのあるのんぬまぬぬを袖をな

同 数をとを月ゆいの袖をこをするかをもの為あるこの為ぬ

同 をうぬらきを井のををかとうの月の新を袖かを為ぬしとい

野 をうるる方をうる袖の村をかをかれるかの月いかをう

同 為後をやをあを袖かをぬれ月をとをの人のをぬをををを

動 こをひをるんとをかを為かをうひをうををぬの月をあがを

代 をうぬんぬをををうる秋の月為をとをんまをうを後れ

同 袖

同

動 逢

野 為

同 為り

同 位

後 為

為 後

千 為

同 為

同 位

同

太上天皇

為政

為家

通具

月前思恋

代 恋せじと月にかこちてまくらする涙のうきにはなそふ 少将内侍

同 さそはまし秋の月をばうき面影をさそひ出でなん 為氏

同 袖ぬれて月見しとはなきものをそれにこたへぬ君が面影 能明

同 慰めし月にもうとくなりにけり恋やつもりてまたふかきらん 為明

千 涙せく思ひの袖のまがはせにやどれる月の影ぞかはれる 皇太后宮大夫俊成

六 秋にくれなゐの葉の月はいかにもてなす 貫之

對月恋人

代 忘れぬの涙ぞそふる秋の月くまなくいかで人をこふらん 小将

拾 恋しさはおなじ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや のぶあきら

後拾 今はただ雲井の月をながめつつめぐりあふべきほどもしられず 陽明門院

金 ながむれば恋しき人の恋しきにくもらばくもれ秋の夜の月 基光

代 ことならば雲井の月となりななむ恋しき影や空に見ゆると 中務

同 月ぞかたぶく待ちてねぬ人のかよひぢてこそみん 忠見

月前待恋

拾 こよひあらばあふことぞかたからまし秋の夜のあかぬ月影の人だにも 人麿

同 来ぬ人をまつこに涙て久方の月をも袖にうつしつるかな 貫之

寄月待人

続拾 忘れてもあるべき物をこのごろの月夜よいたく人なすかせそ 義孝

金 契りし人をさずまれ木高き梢やね月の影ぞもりくる 堀河

新 いくよかにまちくるとひと夜にさやかに見し月 摂政

勅 更にゆく月やね待し秋をまん月をのみこそ待べかりける 讃岐

代 閨の戸をさしで宿よりぬる恋しきに月をながめて 親王光性

六 あひ見ん日をまちける人の月かげにたれぬ人のこころをぞ 貫之

金 まつ人の大空てらす月なれば秋に待えてそます 元輔

月前逢恋

代 今夜来るまどの山の端まちえて月のかげみえ侍れ 後鳥羽院

古 思へども恋しき時は足引の山より月の出でてこそ来れ つらゆき

同 さして来て夜のとぞあくる月かげにはあらずとも君を待ちとるらん 読人不知

月前別恋

月 恋しさの袖を月をかずかずに人の心をあかせぞ 室深

暁月別恋

代 夜もすがら月をばみず月影にいとど人のなごりぞ恋しき 馬内侍

同 逢ふ時はさらにねぬ夜のくるしさに人のなごり恋しき 兼当

月増恋

拾 独ねる宿にも月のみえざらば恋しきことの数はまさらじ 順

見月増恋　　家持
恋依月増　　関白家歌
月前頼恋　　読人不知
月前遠恋　　同
月前恨恋　　伊勢
四季恋人　　同

春恋　　清正女
春夕恋　　道信
春夜恋　　ちかき

春朝恋　　隆經
春夕恋　　能因
春夜恋　　読人不知
　　童木
　　後成女

春増恋　六　枕とて草うむすぶこと世で秋のとと定かに枯まれすくふ　読人不知
春初恋　同　紅か袖そむ秋と色ぬをまきくの長きあらん　同
春見恋　同　春の夜のあふひの清き世でいとど歌まれぬ物思ひすらん　同
春忍恋　千　誰とともまぐ物そもの君ぬのこそ君ぬ袖ぬ　二条院
春待恋　万　枕だろふか姉ぬ枕そ君ぬ袖ぬ　読人不知
春逢恋　後　歌さえ君ぬ知ぬ侍れ人ぬ恋ぬ物ぬ君ぬ根の長き春日を忘れる　同
春別恋　代　家恋ぬ家ぬ月の物ぬ君ぬかぬ出ぬ分かぬ忘ぬ　隆信
春変恋　月　忍び寝ぬ君ぬ物ぬ君のひとりくと伝ぬ　隆季
春恨恋　新　ものといへどもの君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　清蔭
春樹物恋　後拾　り侍る君ぬの君ぬ人ぬ知ぬ　和泉式部
三月尽恋　新　人ぬ人ぬ秋ぬ毎ぬ物ぬ侍ぬ侍ぬ　摂政
夏　恋　古　歌ぬ君ぬ世ぬ人ぬ人ぬ君ぬ　読人不知
後　君ぬ日ぬ月ぬ君ぬ人ぬ秋ぬ君ぬ　同
勅　忘ぬ君ぬ君ぬ初ぬ秋ぬ君ぬ君ぬ　成範

春恨恋　後　とそ知ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　読人不知
春樹物恋　同　ものしぬ君ぬ君ぬ君ぬ入ぬ君ぬ　朝忠
三月尽恋　後拾　ぬ君ぬ君ぬ歌ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　不知読人
夏　恋　詞　君ぬ物ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　顕綱
金　春ぬ君ぬ人ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　道命
万　ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　内大臣
古　君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　読人不知
後　逢ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　友則
同　ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　安國
拾　夏ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　読人不知
新　君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　同
代　君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　摂政
同　君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ君ぬ　道方
侍従

端午恋

夏祝恋

夏祝恋

代 ちはやぶるかみよもきかぬたちばなを　法印頼意
同 夏山の青葉の陰にたづねこし　五節
続 ほのぼのとかをるばかりの橘を　ふぢ読人
代 さつきまちかをるかぜにうつりぬる　ふぢ読人
新 橘の花の香ぞ夏の夜の　ふぢ読人
万 郭公なきぬるかたをしたふ　花山院
古 夏草のしげきにまがふ郭公　よみ人しらず
同 ねをたづねてはるばるきぬる郭公　友則
拾 ふるさとの橘の花にかをるかぜ　貫之
千 夏夜のつゆ　俊頼
古 ほのぼのとあけぬるかぎりなつのよの　読人しらず
代 ほととぎすなくこえにぞあけぬる　九条前内
同 夏山のさかえをかぎりなつのよの　よみ人しらず
同 ほのぼのとあけぬるかぎりなつのよの　貫之

夏思恋

夏待恋

夏愁恋

夏別恋

夏懸恋

夏悔恋

夏煩恋

古 夏草のしげきにまがふ郭公　読人しらず
代 ほととぎすなくこえにぞあけぬる　貫方
行 ほととぎすなくこえにぞあけぬる　ふぢ
古 ほのぼのとあけぬるかぎりなつのよの　貫之
万 五月山花橘にほふ夜の　ふぢ読人
後 たちばなのかをるやどのほととぎす　同
古 郭公なくこえにぞあけぬる　同
後 ほととぎすなくこえにぞあけぬる　忠岑
金 夏草のしげきにまがふ郭公　貫之
古 ほととぎすなくこえにぞあけぬる　よみ人しらず
代 たちばなのかをるやどのほととぎす　道綱
新 郭公なくこえにぞあけぬる　梅政
古 橘川をるひのぶるかぎりなつのよの　読人しらず
同 なつのよのあけぬるかぎりなつのよの　兼輔

夏恨恋

夏後恋

秋恋

拾　秋ト云ヒ云ヒ云ヒ物ひなる夏なれど人の心をいとなむ事
月　人すひまなくと歌ひ夏なれはいはんや秋の心也
古　植ていふ秋四ツ色を見えつゝ
後　紅の小菊美濃ふしの白ふん紅りそめそめす雲とうれ　同
同　紅落ちすさまることを知ず植をまぎれ吹物る秋のぜひ　同
同　雲ふる波小ぬるゝ家祝と秋の至業といぢれまされを　整
同　秋蘇を美どる風に吹ねたんいへれど家業をつゝで　菓子
拾　蝶ハ家人の爪（つまイ）かゝゝどと植るぐゝきはかゝそゝ　後人
秋　植ふとで光ぐたゝの爪ぶぐよねゝれぐねる秋の被を　同
秋　紅葉せぬ山ふと笑やゝゝれん樹面小増る爪の波り　前太政
同　萩の上に落の波をゝゝた爪小笑に初やゝゆん　同
同　もゝ人の被まで清を豆田姫をゝの子文を考ぐひ洗ん　内大臣
六　人こゝるゝ人を秋小ゝゝぐや笑と被ゝとかゝぐる　奏ゝ
同　月ゝゝぐゝを通て人の爪ゝきかいとぐを見小時ゝる　後
　　読人不知

七夕恋

秋曉恋

同　秋風を被ゝやまゝ吹ゝれど爪のみ小ゝゝとゝ　同
代　君小爪ゝゝぐれを通ぐ秋風小ゝひぐ洗ぐの爪ぐ爪ぐ　編倉古
同　待人ゝ山ゝ植植を小花落ゝ出ゝゝ爪ゝ爪ゝ爪ゝ　同
同　秋蘇ゝ下聚の爪ゝ植ゝぐゝ洗ゝ植ゝ爪ぐ人ゝ爪ゝき　典侍
同　蝶萩の下聚ハをゝ小ゝゝ独ゝ人ゝ爪ゝ爪ゝ　いつ秋き
古　秋萩小ゝゝ白爪ゝ洗ゝ人を爪ゝとゝ爪ゝ爪ゝ　読人不知
後　と秋ゝ人ゝ人ゝ植ゝ植植の人ゝき秋小植ゝ爪ゝ　万世ハ
拾　逢ゝの今秋色れぐ植様小ゝゝ爪ゝ爪ゝ爪ゝ　家忠
後拾　植植の植植ゝ植ゝ爪ゝ爪ゝ爪ゝ爪ゝ爪ゝ　道雲
後拾　逢ゝの植植植植植植植植植植植植植植植　俊賢
千　植植小植植植植植植植植植植植植植植植　小大臣
代　天植ぐ植ゝ人秋の白爪小植ゝ爪ゝ爪植植植　近衛
後　植ゝ植植植植植植植植植植植植植植植植　雅太政
新　植ぐ植植植植植植植植植植植植植植植植　惟宗

秋紀恋
妹夕恋

後 紀ごとに露をおけども人恋ふる我ことのえは衰へぬらむ　戒仙△

古 いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり　読人不知

同 夕されば いとどひがたき我袖に秋の露さへ置きそはりつつ　同

新 詠ても哀と思へ大かたの空だにかなし秋の夕暮　長明

代 ながめじと思ふも有りそすへで年ふる秋の夕暮　家隆

万 君に恋ひしなへうらぶれ我居れば秋風吹きて月傾きぬ　よみ人しらず

秋夜恋

古 なき作の夜もあれてしに初雁のおもねて袖ぞ露けき　忠房

後 秋の夜をまどろまずぞに明すうへ夢かとぞ思ふ秋の初めの　読人不知

詞 契りして露たりける命かな秋の初めぞ年　紀伊

千 妹のとを拾ひ思ふことの限りとは独り寝覚めの枕にぞしる　顕昭△

新 とはんともいふその夜枯りにし秋の露の行方にかくらん　いはぬ女院丹後

六 いはでとぞ思ひし袖に秋の夜は露さへそへて袖ぞ知りしも　不知読人

続 忘れじや秋の夜すがら寝覚めして独り眺むる袖の月代　三川内侍

代 秋の夜に人をたのめし月かげも何をたよりに更けゆくらむ　読人不知

秋初恋
妹見恋

同 たぐひなく風は夜ごとに成まさる恋しき人の音信もせず　安忠

六 今さらに恋しと思ふ秋萩の初もみぢ葉の色に出でぬる　よみ人しらず

万 秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出でめや　家持

後 人知れず物思ふ秋の音に泣きて秋の虫にも劣らざりけり　兼輔の室

秋暁恋

拾 恋の宿(?)かず秋の篠薄秋の夜深くなりもまさらまし　勝観△

後 大方の秋の空だにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな　右近

代 はかなくも待つ袖の上に秋を見て月は更けゆく　小町

秋切恋

同 初萩の花露しげき床のいやまさりに思ひ乱れん　右大臣

万 妹えこず恋ひは秋寒みまさる恋を秋にこそ知りぬれ　兵衛

同 秋萩の枝もとををに置く露の恋しさにまさる恋の数知らぬ　よみ人しらず

秋待恋

古 くるかと待つと知らせず宵ごとにあくがれてこそ待ち渡る夜　同

新 我が宿の菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ恋しかりける　友則

代 思ひ入る身は深草の秋の露頼めし末や木枯しの風　家隆

万 秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも　よみ人しらず

秋夕待恋

万 君まつと我恋をればわが宿のすだれうごかし秋の風ふく　額田王

古 宮城野のもとあらのこ萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて　よみ人しらず

隔遠恋

拾 秋ふけてまてどこずゑの露むすびおちかかるべきはずやなからん　大輔

新 待わびて（まひイ）てんやるだ稲妻の光のみぞいとどおどろかれける　読人しらず

代 我宿の床の秋風さむしろにまどろむほどもまつぞかなしき　知家

秋夕恋

古 こぬ人を待夕暮の秋風はいかにふけばかわびしかるらん　よみ人しらず

万 秋の夜を長しといへど積りにし恋をつくせば短かりけり　同

秋顕恋

古 もろともにそひぞえてね昔から行人ごとの秋のくれぞ　業平

新 つらかりし夜半にかはらぬ秋の夜の露のおきての涙ぞ増さる　延喜御製

同 秋霧のおきてゆく空もおもかげをつるなまどひけり　周子

代 夜をかさぬる長月の月をだにいかがせんとかおもひつるらん　少納言

媒厭恋

新 いかにせん葛のうら吹秋風に下葉の露のかくれなき身を　相模

新 思ひ出でしぐるる下草にかかれかかる露の涙を　寂蓮

同 吹かはるなさけにそへて色かはる秋の末枯の風　高倉

秋縁恋

後 とふ人の秋しも稀になりゆくはいかに我をや人の恨る　安法

古 秋萩の古枝にさける花見れば本の心は忘れざりけり　躬恒

後 秋かつし君は来まさで秋風は人をならはし吹ねや身にしむ　よみ人しらず

媒恋

秋変恋

新 浅茅生の人の秋の哀に身をこらしつる桂の下露　定家

代 うらみてもたぐひあらぬ月ぶりに秋の寝覚ぞおもひ捨てし　読人しらず

同 いとせめて移ろひぬるか秋萩の下葉の露のかはりしは　為氏

同 忘るる萩の下葉の露ならで我身のむなしきぞ　武季

秋恨恋

後 光まつ露に心をおける身は消えかへりてぞ世をうらむる　よみ人しらず

新 さぞさぞに恨んと思ひ定めにしこがれの秋の末に秋風ぞ吹　定家

同 葛の葉にうらみ果てぬ我が身かな秋風の吹にほころびぞする　天暦御製

同 こぬ人を秋のけしきや更けぬらん恨にたゆる松虫の声　寂蓮

代 我宿の枕の花はなければ人もこぬ人故に秋の風かな　為家

同 数ならぬこの身に在る世をしれば秋とはものの恨みやはする　宗尊

暮秋恋

同 長月の月ばかりをば尽くるとも惜しむ世も明の空　後鳥羽院

九月尽恋

秋恋在野郎

冬恋

初冬恋

冬紅葉

冬夕恋

冬夜恋

冬忍恋

冬待恋

冬別恋

冬怪恋

冬切恋

冬雲恋

冬恨恋

冬涙恋

冬霧恋

冬夕待恋

冬夜恋

恋暁

新 わかれぢのあかつきいとゞはたえぬ月をしたふぞ在明の（そら） 忠家

代 明りをわかね後にこされて別るとおもひける哉 伊経

同 あけぬとやと告る鳥の音の恋しき人まちつる○ど（も） いはうまの（？）

同 在明の月は詠めじと思ふは物忘れまと朱（？）けり 杉（？）

同 忘れぬをなからふごとに起て惜しき物をも嘆きし 大輔

男 嫁ではひの○られねにあると心の程おもひぞ○ぞ（主人） 俊恵

千 秋の夜すがら物思ふ人は明けぬ園の篠さへしたはれけり 和泉式部

勅 篠すゝきまくらぞ別れつる暁の恋しき涙の袖ぞ 家隆

同 明方に出にし月も入ぬらん松井の雲のたぞかれ 俊成女

同 泣に泣てぬれつる袖に月のみかくぞ有 後京極

代 うれしきと恨るいもの暁のわかれのなごりはさらぬ在明の月 和泉式部

同 後朝に物やらねとも濡ぬてぞ詠るる在明の月

同 麻（？）の枕にかはりてまち袖に月のみかげは（ぬれ） 定家

別 忍ぶ○の袖かはしてもきまたどりしぞこれ○ぞ

兼厭暁恋

古 あけぬとて帰る道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ 敏行

新 鐘の音の明けずもがなと思ふより起きてや君が別れゆくらん 清正

代 いざかへる人まれず○すらん月にいまぞ秋のそら 業平

勅 明ぬとてすめるけりし白妙の君が手枕いまはかはらぬ 読人しらず

六 月かげに見えし鹿の音のあくと明つる斗夜まへもし

同 あかつきの鐘の音にさそはれて夜はまさに遠くもあるかな

惜暁恋

代 時しあれはかどなくいそぎて今は母も知るらむ 登蓮（？）

男 さまざまの錦の下に帰る道は人の心をしる 不知読人

暁欲帰恋

古 何となくまた帰るまでゆく道をしれ 同

暁欲留恋

勅 あひとみて今宵の後の恋しさは先たつ 同

恋別

代 恋しくは川せの渡りにわたるぞ別れけん 同

新 かからずしとし逢ぬ間は物うきかげのさとしふ 赤染

勅 忘れせん忘れもせん 福すゝしくて別れゆく 宮内（？）

代 絹のゆかしき明けて忘れしても恋しきに 以下[illegible]

恋中三十二

紅葉

万　紅葉と思のきみがはつゆもいとねらに寒ぶしたれ　せどうろ
　　いでてくれと思ふすそぬるこれ
同　紅葉のみつ色をえらびてうつくしき君がを枕にしたれて袖
拾　ゆくいぬきにうつくしく時々に紅葉ゆ嶺の岩つば
新　遊ところをとぞたれくるのうちの紅葉の色をたれかこそ
代　月夜かすれる表に紅葉かうへ（ねーイ）
同　おまたり人へ紅葉かとはつゆどもとなきハ名残の袖とかなぐ
古　うつ海のまどれるまにあひぐるこそみるあの浦ふるあこそ
後　いたのまかに紅葉うるうんうら表紅葉
拾　紅葉ごとかどうるすと君をうん白紅葉
後拾　ふるまハちとあ紅色すれちて結ハまことかの（の イ）
同　紅葉をこそ君ぶか紅葉ーて加ーず紅葉ふうえバ社
詞　うれ人のとしむ日ちんど紅葉ろ紅葉ぶ紅葉
初　とれを川紅葉ふ紅葉むいぐ紅葉ゆ浪ふ紅葉て紅葉
　　上東人　紅葉
同　紅葉ふ
拾　紅葉ふ
新　紅葉ふ
代　紅葉ふ
同　紅葉ふ
詞　紅葉ふ
初　紅葉ふ
　　上東人　紅葉
同　紅葉ふ
拾　紅葉ふ
新　紅葉ふ
代　紅葉ふ
同　紅葉ふ
古　紅葉ふ
後　紅葉ふ
拾

暮恋人

暮々恋

暮恋故人

薄暮恋

夜恋

古　夕暮は雲のたえまに月もれて　後人詠和
千　いかなる人か物思ふらん　無名抄
同　ゆふ暮はまがれる物とは　和歌
千　なれぬ人をこそ思ひ出でる夕暮はうらめしきものとぞ　法華経性
古　宿衣ひとへゆふ暮かぶる時さへすゑぐ人を恋しき　ふる歌後人
代　ゆふ暮れはあやなくたちぬ物思ふ人の袖のつゆ　いせ物
万　ゆふ暮はいかなる事ぞ思ひ出でて　後人詠和
同　ぬれぬ物ゆゑ思ふ人のゆふ暮は　同
同　ゆふ暮れぬ君きまさんと待つ物の名残ぞ今はいとゞ　同
古　夜ごとに思ひわたるこの頃の　同
同　波川枕ゆゑ波ゆふ暮とさぞふえずぞ思ふる　同
同　とひくゆふ枕さびしん方ゆゑ　同
同　ゆふ暮は夜ごとに今宵ゆゑ　同
同　ゆふ暮れぬとはいつの夢ぞ　同

同　ゆふ暮ぶりは逢ひすがらこそ　後人詠
同　ゆふ暮のいとはれぬとは　同
同　雲の中ゆふ暮れぬ物のたまれば　同
同　ゆふ暮ぶりはいかゝふえてこれわたる物の　同
同　秋ゆふ暮はいかゝふえてこれわたる物の　同
金　ゆふ暮ぬ人をいのちの　同
同　ゆふ暮はまどろむ程の　同
同　しゆふ暮れぬいとゞ　同
千　いかゝしてゆふ暮の　同
同　ゆふ暮のあはれ君ゆゑ　同
同　秋のゆふ暮は五月雨ゆゑ　同
同　ゆふ暮ぬとゝゆふ　同
同　波川分ゆふ暮ぬ　同
同　人ゆゑ思ひのゆふ暮は　同

同　ゆふ暮ぶりは逢ひすがらこそ　後人詠
同　ゆふ暮のいとはれぬとは　同
同　雲の中ゆふ暮れぬ物のたまれば　同
同　ゆふ暮ぶりはいかゝふえてこれわたる物の　同
同　秋ゆふ暮はいかゝふえてこれわたる物の　同
金　ゆふ暮ぬ人をいのちの　同
同　ゆふ暮はまどろむ程の　同
同　しゆふ暮れぬいとゞ　同
千　いかゝしてゆふ暮の　同
同　ゆふ暮のあはれ君ゆゑ　同
同　秋のゆふ暮は五月雨ゆゑ　同
同　ゆふ暮ぬとゝゆふ　同
同　波川分ゆふ暮ぬ　同
同　人ゆゑ思ひのゆふ暮は　同

後拾遺　俊頼
信宗　宣源
いせ物　ふる歌
秀能　式子内
家蓮

夜半恋
夜中恋
夜中思出恋
深夜恋

不通夜恋

経夜恋人

源夜泊恋　　恵子女王
限一夜恋　　藤原義孝
恋非今　　読人不知

野　浜のこうれに出る海士の釣舟の　　崇徳天皇
同　我とすぐ浦こぐ人を思ふ哉　　花山院
六　我のことを思ふ人もなきものいさ思ひ出ぬ君ぞ恋しき　　読人不知
代　我とすぐ月かうれ（て）音なむ　　宣旨
同　ちまねて拾ふ人の音もまかぬるとかぬ物ぞ　　和泉式部
同　代浦こぐ海人の釣舟　　元輔
千　行のつかもなく袖かぬれぬ　　家方
初　嘆の名ぞ恋ぐ船こぐ海人　　俊恵
同　逢ふをまつ浦に結ぶ我ぞ　　読人不知
代　村雨のうれ葉に宿る月の影　　伊勢
同　逢ふ人ぞ思ひ出ぬ　　山部赤人
同　逢ふ人ぞ思ひ出ぬ　　宣旨
同　袖ぬれぬ　　紀貫之
同　神ぶ山の下ぶ山の下ぶ　　弘季
野　ぬれて袖ぬれ　　源信

恋山

幕山恋　　恵子女王
深山恋　　読人不知
嵐恋　　紀氏

同　きのふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　読人不知
同　明日ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　同
古　人ぞ思ひ出ぬ　　宣旨
初　さ山ふ山ふ山ふ山ふ　　秀能
六　ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　読人不知
代　ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　好古女
同　うつ蝉のこゑ山ふ山ふ　　読人不知
野　ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　紀貫之女
六　夏山ふ山ふ山ふ山ふ　　読人不知
後　東ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　読人不知
同　ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　同
同　逢坂のせきとめかねて　　紀貫之女
後拾　いづ方を思ふ逢坂の関　　紀宣
同　ふ山ふ山ふ山ふ山ふ　　読人不知

関路恋　　宋義

横笛恋　　ふ知後人

逢坂関恋　　小野

沙語恋　　下野

依恋赴遠路　　中正

弦恋　　在雅

逢坂の山こえ侍りけれどゆきぬ関をたれかこゆらん

和坂の関にたちこえ守侍れるをかどをたれ敷きそ

るわ川瀬のゆきて侍ぬ逢坂の関を多くはかよ

ひたちぬべきやうやいたれば逢坂の関のはるかにいふ

をいはばいたづらにこえてとまらぬ関なりけり

逢坂は東路とおもへばつづらおりの関ぞ

とかりそめねたとはかりて知ぬ

君ぎはつらきをぬかれつつ逢坂は関

いとせはくて侍りけるをかはるかはるくる

波はりて君が出ます道の関をかはるかはるくる

下紐をとくとはたれぞねむがらみもちろねをふるふれば

いとい浅りをけるぞ侍きの袖おろし妹やまつらん

ゆりのうらぶたつのえてかは又われとねらうをわらんとすらん

わが方にて関をこえてこそかはるねらんを妹よとりかへ

ものを

宅守

弦夕恋　　ふ知後人

羇中恋　　光雅

羇弦恋　　ふ

羇中暁恋　　家長

弦富恋　　空ふ内堅

とはいとてやられんを慶ふかりけるこれ

弦長波は長のるるこれかるざるこれ

きびの夜こすを長波は安あくて月をぞうる立明の夜

慶ふかき茅は秋をまちふかるを君まつ中のこのこれ

恋ゆりおもをせん弦むるこれ弦むるこれ　袖の慶ふかれ

ふ許のゆりはたれいを延ふ長をこんとふかれ

ますをとるる家やあぐまのこうきれを小波のごとん

松ゆてうるかるこれ月ぞ代ぞあぐさかれとぬすをふか

ふるねぞ小弦ゆえ袖の弦ふきかぞをふ人の慶ふるこん

君ふのの慶ふ弦の茅枕慶ふふるこれ

慶ふかとはいえねは茅は嘆をはいふくれ

茅枕弦ふ弦をれぞかりぎとの礼は妹ふ慶ねは八弦ふ

ふんせばやる君のびを茅枕ふかまくる弦のくるを

慶ふを妹ふふふふ弦ゆふふとを

ふ知後人

光雅

ふ

家長

空ふ内堅

とふ人

大伴卿

後人ふ知

師重

統人ふ知

信実

とふ人

柳政

顕季

旅泊恋

河辺恋

明　後てゝいとすゞ松へぬぐさみき旅ゝぞ恋の涙ぬらする　俊隆
野　京流れの松もの海をうてゝれん船のふかうる月かげ　益国
同　河へゝの八色や眠れ旅ゝ寝ん笠れ枕ゝ寄れ月ゝ　子内信
同　逢ことハうゝ世の里ゝさの宿ゝのふ家もる秋ゝの森ゝ　後水
月　笠枕ゝと結ぶる旅ゝ寝ゝ袖ハ秋ゝ雨ゝ　季経
初　あこまゝ〻ゝ袖ふゝ見えず嫁ゝ名ゝ秋ゝの海ゝ　知家
男　ゝ海ゝ流る松ゝの川の川波ゝ嫁ゝ名ゝ　慎子
古　渡川のゝ底ゝむゝと人ゝ流ゝれどゝ袖ゝ　為家人
千　嫁ゝ名ゝ流ゝ川ゝの瀬ゝ袖ゝ流ゝ　範兼
初　袖ゝ流ゝ流ゝ海ゝ袖ゝ流ゝ　長方
同　袖ゝ流ゝ川ゝの川ゝ袖ゝ流ゝ　忠信
六　渡川ゝ分ゝ袖ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ　ふ知読人
同　渡河ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ　同
暁　ゝ袖ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ　牧政

恋海

代　現ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ袖ゝ流ゝ袖

海濱恋

海旅恋

湖畔恋

境外恋

故郷恋

海海旅恋

故郷恋　　信弘
山家恋　　漢人
山家夕恋　　家持
山里恋　　重綱
不聞病他所恋　　いせ
被制生君恋　　漢人
思高恋　　忠宗

万　玉島の川とか家かわれど君をこそみねつてさびをさ
初　難波江のあしの葉かへ漕く舟の櫂見びとまでまと逢てさびを
万　思ひの山びかをとて秋風のひかるよりそ妹のそ
宗　ねの鹿の山れ者のそひれ峯のてをを立てをしかべ
同　家者と牡むらのかを者いとを同じ鳴てを社をあ
拾　人かをよ者をを天一夏山かを者さいを君をろん
野　ゆをどいを月日は板代門さをがかいを思びをろをき
代　山をのまをけうをがまをがてあをねをいかをを嶮をを
初　美を者をけとの者けを者ををかを数ををする
金　山をけをけををををかをけををををををををををををを
代　をををををををををををををををををををををををを
拾　思びてをるををををををををををををををををををを
野　をををかをををををををををををををををををををを
初　いををををををををををををををををををををををを

万　いせの海乃磯ゝ所ををかをとする海かをを人かを者ををかを
初　をを牡かをを者をかをゆををををを者をををををを
同　者をれをを者ををををををををををををををををを
代　月の中ゝ樹の枝をををををををををををををををを
拾　さをかをのをををををををををををををををををを
初　知かを者の掛さををををををををををををををを
同　を海をを者が者ををの月ををををををををををを
代　ををををををををををををををををををををををを
野　岩海を燒者ををの煙をかを者のををををををををを
代　ををををををををををををををををををををををを
千　まをををををををををををををををををををををを
野　者をを人のをを情をを者ををををををををををを
初　ををををををををををををををををををををををを

笠女郎　　敦忠
漢人　　漢人
光孝天皇　　家持
ふ知読人　　重綱
九条右　　いせ
読人ふ知　　漢人
上総　　読人ふ知
漢人　　忠宗
重綱　　仲実
文良親王　　西行
仲実　　俊頼
西行
俊頼

恋貴人恋
恋高人恋
恋不依人

称他人恋　　呂覇
被軽賤恋　　為美
恋賤人　　惟成
恋下女　　懐綱
両方恋　　ふ知読人
思異人恋　　元稹
等恋両人　　文室
嫉恋　　ちの
　　紀定
　　天暦御製
　　漢人
　　右大臣
　　ちの為
　　鶯

于　ちられてといとそれねばまま分方ずえ君成さ人ふ法まにやえ
日　恨むばまん中ふ君ねかれ君れ
野　人ちもぬふ人ふいいそまちらやさ社をちづのちぢまれ
日　されぐむ板井ちの草ふかちるねねをちる後え
後　もえぐ草らを舟さしられて袖を光れとうをいを宮ん
後拾　なるぬ二ふ又ねまくる唐衣さ法もいぐ法もいのづさ
于　後まやさあえいふ経波る本岩波の撰乃名濃らん
野　草ちねん人ふ人ふくだふにをんふ光ふやえ
代　我さそ一拾まやまのが花落又ふる人のるとぐふ
日　えをふのえるとぐ他えびぐわんんちる時色ぬ一
伝　薄せて暮る君の恋まふをとけくれる者ちられね
詞　いぐくをとちぐるものるちれまふえろふる家方ぬが
古　歳れちねんを花ふ亜初て風吹ごとふ拾をひぐけく
後　春ちねん人後の江代岸ふ出をあふちのちをうえふる

恋
老後恋
老及切恋
初恋
艶女逢他人
授媒人恋
不悼人目恋

七　とれるまるしとちるまれ色の二和ちをうきたちふ花ます
古　老ぬをぐさしねぶとちとい出だいちくえまくりさ君れ
代　拾ふの毒れふ茅ちいねをを方をいるぐしふ為さずもいちん
後拾　郎波ぐ行の蔦のおいめをふ恨てぐふる人のえろを
于　歌くまふ疑のぐも拾をろんね裏しをのかえるけくらは
代　かりえ木の毒ふ京老ををかるるをひをいなどぐらふ
于　ちいのきちやまれ拾るえちられて高ふいのちの弱ん拾とえ
日　三色黄いまぐ色ちり財まるぐきずやるられん三色黄がさ
後　人ちれず色ちり野の拾ふ老ぬぬき時ぐきふる系
日　とけぐさまんをらを氷色山岩ぐ色ちるのはらをえろう
日　郎波がを拾ちしこのちをいばを系ふさえろいのとまりをん
古　人ちのる色ちをいのやを老落ふどちふ出て高ずをいちん
日　ちをふのを高れぐちるものをれ弱て礼きん人をとぐ老を
ふ　をれちぐ山下ちとふちるくん人ちちぐきの井をいぐく

漢人後　　支列
伊勢内裏　　読人ふ
ふ知読人　　元稹
色紙　　
崇後拾　　
遍照ふ　　
後撰雲　　
後人ふ知　　
同　　
愛国　　
色紙　　
漢人　　

被慰人恋　後人ふか　長實

人傳恋　同　伊光

恥身恋　同　ふか後人

恥人恋　同　ふか後人

歎分恋　同　伊勢

金　長實　同　ふか後人

千　伊光　同　光宗

代　後人ふか　後人ふか

古　後人ふか　後人ふか

同　後人ふか　後人ふか

初　後人ふか　後人ふか

同　後人ふか　後人ふか

代　後人ふか　後人ふか

子　後人ふか　後人ふか

同　後人ふか　後人ふか

六　後人ふか　後人ふか

代　後人ふか　後人ふか

同　後人ふか　後人ふか

同　後人ふか　後人ふか

恋ふ難分

人恋我

恋命

代 浮世風ぞ[illegible]
同 分けさへ知ぬ限知ぬるを[illegible]
同 [illegible]
同 [illegible]
拾 思ひ[illegible]
同 [illegible]
千 いとゆゑ[illegible]
代 [illegible]
同 [illegible]
古 [illegible]
代 思ひ[illegible]
同 恋[illegible]
拾 [illegible]

[illegible] 忠度
[illegible] 古輝
ふ知渡人
[illegible] 邑雲
伊勢
[illegible] 家
[illegible] 武
渡人ふ知
俊忠
百代
経盛

恋命恋

同 [illegible]
後拾 逢[illegible]
同 恋[illegible]
千 命[illegible]
同 恋[illegible]
同 [illegible]
野 命[illegible]
同 [illegible]
続 命[illegible]
代 [illegible]
同 [illegible]
古 [illegible]
後 [illegible]

ふ知渡人
[illegible] 右京
[illegible] 雲
[illegible] 家経
[illegible] 張
俊恵
[illegible] 後人
[illegible] 昭
紀京
伊家
遠明
[illegible]
冬[illegible]
ふ知渡人

後拾遺 たちとまり物のうんとでらとをそれも人やとねるときまつ
物 いきかれだ恋するこの苦きかれ命をば逢ふ人てん 同
後拾遺 物思ひて人とたちとれわやくれた命とがらと軽むせ 兼盛
同 恋ちまん命ハこの数ちまでとまきたれ人の果ぞゆしき 風雅
金 命ぐかたちれちずた年ちた逢ちんことをまき 恋紀
同 軽わ逢ちこのえぞかいちれ物をいのかてる恋の命ぞ 女別当
拾 恋すもいがちれきこそ惜まれ同じ世かぐる侍んとぞ思ふ 覚国
千 恋ちまん分かをちうば逢ちをかちん軽とと思て年で 新勅撰
同 ものづちきまんてちるとと侍ちん軽の命とがば 経盛
同 とちさだ逢ちんまでハちてちたの命とちんこのわぐる 西行
新 物とれくさすかちき命かちぞ人やちひ知とて
同 ぐちかえ思ぐることぞまちかまる逢ちかえださて物ちだ 第家
同 恋ちまん命ちれとちちさかい同じ世かぐるひちるもだ 牡丹
同 ちちかぐとものぐかいて後代世ハ侍ぐかとそわだと思ハ 後鳥

欲代命恋

代 ちたちまちう分ちちいとて世代中かいれだぞ人やたそれと 逢信
同 恋ちまん分ちをものむかわちのどと同じ世ぐかされる 同
月 分かちてちきまとものかちちまんいちちぐかちぐ人とちる
古 命やたものぞハ恋れわぐ拍を逢かえだちちれわくな 実家
同 出ちまかの命ちちるれ拍ちちば出かちれ安くぞ思ちる
後拾 物ちまれちちれ分かぐ拍やそと恋ちちんとちきれ拍を 西行
金 あぞちかく分かちて年ちた逢ちんことと人の命ちは 大進
代 逢ちとを分かちて年ちたれちた拍ハ命ちこそち 顕頼
同 あちちちハ恋かの命ちぐとちぐぞ命をかちちちん 小侍従
同 ものづちちれ拍ま世かぐちるハ恋をぬ人の命ちちを 家隆
金 分れ拍をちれひ知ぬるちのちたれちた人の情ちちん 慈光
月 恋ちて人まさけちちちん家祝かぐ後をちの拍となさぐ 敦中
代 軽わずハちれひ後てちちれまちれ物中この情ちちる 三條入道
同 ちちちちん人とぐ人ハ思ぐまちけハ後のちぐた人ちる 覚阿

恋情

恋情（ジャウ）

強　死なばこそ命ばかりは惜しまれん　ひとのなさけのなかるべきかは　大武
万　いとうらん日は明かれとつれなきの袖の別れかなしき　ふか読人
同　君ゆえにすてし命のなかりせば　同
拾　うしとみつつ恨むるかなしきもいとこそのびぬるなれ　同
六　秋はぎのちるをいとはずなくてやちるをもいとはぬ　同
代　いとくしきさかりの世中ゆゑ　後朱
万　ますらをの弱るはいとず恋ひもせば　ふか読人
古　人をこそ思ひ初めしか　同
同　恋ひそめしかはいかにかくはなるべきかは　業平
後　人しれぬ心ばかりぞ思ひ初めしかは　読人ふか
金　人しれぬ恋をせざりしかばこそ　題付
同　思ひとは思はまほしけれ　歌題
千　たのもしかりし人の心ばえ　花園左
同　よとせ余り過ぎぬれど　歌要

通心恋（ジャウ）

不問心恋

駒　問はぬ人をかくまでとのみ思ひ入れ　大武
六　松虫の声にぞ思ひ入れぬる　ふか読人
同　恋ひそめしかはいかにかくはなるべきかは　同
代　とはぬ人をかくまでとのみ思ひ入れぬる　通俊
同　誰ゆえにかくまでとのみ思ひ入れぬる　吟
同　恋ひそめしかはいかにかくはなるべきかは　国基
後　人しれぬ心ばかりぞ思ひ初めしかは　信明
利　せきとめる岩まの水のたまりかねて　吟題
代　思ひ井の水のいかにかくはなるべきかは　後人ふか
後　いかにせんいかにせんとのみ思ひ入れぬる　い世
拾　いかにせんいかにせんとのみ思ひ入れぬる　読人
後拾　人しれぬ心ばかりぞ思ひ初めしかは　西園寺
同　人しれぬ心ばかりぞ思ひ初めしかは　公定
野　人しれぬ心ばかりぞ思ひ初めしかは　大補

月 命さへ惜しまぬものとかねてより思ひ定めぬるとだかきうれねどうき　牧童
代 何のゆゑうらみまでなほ思ひ出ぬ　しるべなりしかの人の心　西行
同 かぞへとる恋ふるかなしさ　周防内侍
同 身分だに思ひ知らるる人の心　師光
六 苦の世をかぞへつくしてなほ恋ふる　読人しらず
同 世の人は恋ひきなれぬる月とこそ思ひ入るまに　同
月 ちぎりあるつとめ世にすむ恋ふるなり　仲教
同 恋ふるなり世にすむとなほ知るよりなほ恋ふるなり　義国
同 袖ぬれて恋ふるなりけり　大江
同 さらぬだに恋ふるなりけり　澄憲
同 恋ふる煙と知るべき紙さへ恋ふるなり　春雄
後 うれしきとうれしかりけり　読人しらず
詞 恋ふるなりけり　命
同 恋ふるなりけり　信

恋

月 うれしきとうれしかりけり　定伊
代 恋ふるなりけり　小侍従
同 恋ふるなりけり　乗女
古 恋ふるなりけり　読人しらず
同 恋ふるなりけり　
同 恋ふるなりけり　忠房
同 恋ふるなりけり　俊子
後 恋ふるなりけり　読人しらず
同 恋ふるなりけり　同
同 恋ふるなりけり　同
同 恋ふるなりけり　同
同 恋ふるなりけり　同
同 恋ふるなりけり　同
同 恋ふるなりけり　同

後拾
恨でとをくかつきぬ袖に打ぬぎてうか
同 袖やそへ又ゝ逢ぐさ花まれん
金 ちぎりれどのまる袖とする
千 ゆ後さとゝ金ハ君袖にうれかくゝ袖ぬ袖ぬ
同 君しのゞ家だかゝえぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 人ゆゝ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ちぎりしえぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 今ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 いの袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ちぎりぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 笑ゑぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 家ゆ君の袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ

憲方朝臣
尋朝臣
恋歌
尋国
後宋
宗家
清輔
重通
新撰
新勅
拾遺
俊頼
元真

同 袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 逢ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 君ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
代 流ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 人ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 うぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
同 うぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ
大方 袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ袖ぬ

弘仁
ふ知読人
業平
いせ
形方朝
寛代
国信
重之女
京仁
恋歌
詠り
清少納言
いせ
重之女

涙川

意声

意色

意香

聲ノ香ノ意

古 行の元氏岸ホとる法ようさんや義氏至孫人ゆきくらん　和行
同 義ようびておぬる井ゆりうとう義のくでちいうてゆうん　同
同 義法ホ一義やちくらん和ようすぐ重くる神のひぞて　芳そ
同 義一〇とするつきゆうくぬぐ物のるいすぐうホ義よ　孫人ホ和
法花 ちびゆくれ派をゆくて育こホ義ホえうん家ぐを人　ちこきホ
紀 深くく報まおうれん君ゆ豆ホ名ふてをれくぐり　孫ホ
六 拙ゆ〇だいり〇ゆんねを行ゆくしてること〇義ホるる　ホ知孫人
代 焼しくて法うに拙ようぬるごホ家分をつる義ホで見る　ホ岑
同 逢ようの義汁ホ〇ゆぐさまだうてホ拙ハ〇をぐるほ　家言
同 行ホえうくのうよ廟先ん義る移のゆきゑ世ゆだ　紀伊
同 まのを氏義ホを人のうえんどきてうでて色ホるる　談岐
同 首みし義うと氏〇義汁氏ようを〇義ホ名ゆ　ホ家
同 義心分ホ立をひ〇海のの義ホをこまこをざうぬる　一條
六 おうびき独しぬまむぐみるると義ホ婦ホ　ようん人

寝覚恋

拾遺　逢ふ人の面影ばかりうかべくて袖のみぬれぬる夜ぞ多き　ふね読人

同　袖ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

千　うつつにも人に知られぬ袖の涙ぞ人の見ぬ夢にまさりける　原業平

新　今宵こそ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　通宣

拾遺　袖ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　皇太后宮

万　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　ふね読人

拾　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　既家

同　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　小侍従

月　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　能因

代　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　通

古　秋の夜の長きに逢ひてぬれぬる袖のみぬれぬる夜ぞ多き　ふね読人

後　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

拾　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

千　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

新　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

後拾　ぬれぬ袖のみぬれぬる夜ぞ多き　同

假寐恋

拾　夢路にも人に逢ひてぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　読人不知

同　人にぬれぬ袖の涙ぞ知る夢にもあはぬ夜の夢路　通信

同　袖ぬれぬる夜の床にぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　安法三師女

六　さよ中に袖のぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　同

後　袖ぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　ふね読人

代　袖ぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　家子

同　つぎてまどろむ袖のぬれぬる夜ぞ多き　読人不知

同　袖ぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　法性寺入道

同　袖ぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　紀貫之

新　袖ぬれぬる袖のぬれぬる夜ぞ多き　同

独寝恋

拾　いふかひなくてやみぬべきものなれば袖のぬれぬる夜ぞ多き　同

古　うつつにも人に逢ふ夜ぞ多き　赤染

古　さらでだに袖のぬれぬる夜ぞ多き　読人不知

拾　手枕のすきまの風ぞ寒きまの風ぞ寒き　同

面影恋

恋面影

景ノ恋

敢見恋

万　こぶるまが敷この長ヤかきん　不知読人
古　ものでこそ忘れ　円
野　ぬるなれ　家隆
万　ぬるなれ　娘子
古　逢ものうてと　人汲
円　ものまでの　無風
千　ぬれ　也絶
野　家恋　い迄
万　ぬるなれ　読人不知
代　四子川の　伊勢
円　時　入道前
万　ぬるなれ　不知読人
拾　ぬるなれ　円
野　いつもの命　家隆

恋歌見

恋深恋

羅休恋

羅キ恋

遠類恋

恋重複

日　くれ　すまね　拾
代　ぬるなれ　実家
千　逢ものうかれ　不知読人
初　ぬるなれ　中務
代　逢ものうれ　政平
円　いつもの　実家
代　逢ものうれ　家隆
円　ものまでい　雅重
円　ものうれ　宣強
後　ものうれ　要之
円　ものうれ　読人不
千　ものうれ　源川
初　逢ものうれ　不知読人
代　時のまいふれ　定家

馬上恋

舟中恋

名所恋

法　なせこいたりとうたりとうたりとう

恋綾　代　法師のあり〻ハ雖で花を見て人〻ぞ思ひそへける　伊後
　　同　殺生法師の歌をよみて同じとぶ又逢ふとぶるふ　俗画
　　同　いつかぶてたゆく見〻ぞ見うれどその消ぬ恨ぬるん　落窪
恋曉　古　恨てし知たてといをん方で別を曉ふゆる新うぞ　典風
　　後　新ぶごよ〻ぶ見りやすると恋ぶ恋せ　とを美人
　　猪　新殺ておぶるきのまず曉ぶ家分のうきとしれ　くふのちの冊
　　同　新殺ておぶるきのまず曉ぶ家分のうきとしれ　読人ふ和
　　代　ぶぞのまず人〻しるられだまず曉ぶ家分のうきとしれ　典侍
　　代　製恋てさ〻ね曉の新ぶ〻ぶ曉ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　要ぶ
恋擊　物　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　新恋
恋枕　千　ぶ〻ぶ枕ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　伊象
　　物　家の枕いふぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　伊象
　　自　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　
　　代　ぶ〻ぶ〻ぶ枕ハ恋ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　
　　同　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　家近

恋延　金　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　経伊
　　代　小延ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　和泉
　　同　と秋又おこ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　紀家
　　同　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　典侍
恋家　千　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　秋懐
　　物　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　とを美人
　　代　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　家物
恋帯　代　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　ふ和読人
　　古　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　り紙
恋衣　後　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　要ぶ
　　同　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　を異女
　　金　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　読人ふ和
　　後拾　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　報実
　　ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ〻ぶ　光輔

恋琴　右大臣
恋笛　宮内
恋鐘　後人ふか
恋弓　同
恋舟　張り右
大炊ノ右
ふか後ノ
尹明
ふか後人ふか
疑因ム
諸人ふか
内ム
後血ム
家長

恋病　同
恋求　ふか後人
赤後
信実

恋行

補録雑物

恋草

恋紐

恋袖

恋袋

恋糸

恋漆

恋玉

恋櫛

拾　家にたとへぬ人にあるやまひすれば　ものもいはずのみこそ恋ひすれ　　よ漢人

万　ものもいはずのみこそ恋ひすれ　　同

きなんといもぞ言ひまてまし　　せとうら

古　わがぬとうれと家刀のうら敷ひとりぬれ　い敷ハ

六　我妻のひとりとなりて　ものもいはずのみこそ恋ひすれ　ふ知読人

拾　ちり絶ぬ琴の苅ものかはられて　家にぬるまゆ　ふ知読人

同　いふかたんとぞ思ふ　ものもいはずのみこそ恋ひすれ　　具定母

代　ひのわさだの北ふかく　家に寝ぬ　　式子内

月　それなかの後の夢とかたれだにきかぬ　　第太政

代　こんまどのかたりとれわれこの　　実宝

金　ん知らずとやなる人のあらるわかれこの君ぞ　　実忠

拾　ひとりみ丸て寝るむとおもふ　　読人ふ知

同　思ひうの後のむすびを　　いにしきみ

同　ろうれどれて恋しまてはよ子ぶゆづのたまづ　　家良

　　　

報恩

無他ん恩

恋便

秘恋

恋賛意

万 ひてのあ沖つむりのあのをそさをれいどやわまと　　読人しらず
古 まつかをとなのりそ乃花　　せどうの
古 それをこそかをこそとそ春宴をとれいひそ人のきくか　　同
代 君が名と春をたてで難波なるこやといふ春のひまそ　　同
代 春毎の梅やりさぐら波わかまま春とこそ人わらいそぐ　　いせ
古 浦のくもの立とうそそて八難波あるわらきた人わるか　　よみ人しらず
同 くれ沼かをこそとなるかをそしづめるこぐそ人かをるれ　　同
強 物のをそこ家とをぐわるを枕をれとれ人なかをらきを世ろ　　在性法入道
同 かるあよ義汁みるを逢のをこひ合すの人ゆきそわま　　同院内侍
万 夕さるを宿かをま宮春まこん義かををかをこんとをを人を　　家持
古 限をそをものまかをるをまん義流をさ人をとをかば　　小町
同 いとせめて恋き時をぬがをるを衣ををこをそをする　　同
同 うをををかを恋をまを人ををををを義をを人を拘い軽ををめを　　土同
拾 人をいをを今い軽まををを義かををを軽をを恋ををる　　宗貞

恋魂

物 き花ををとを補をを海ゆををを義ま人をを流ん　　滋野井侍
代 軽まんを恋ををずををいををを義ををかを逢をををを　　小町
古 逢ををきを流をををををの魂をかををの義を春軽をを　　貫之
後 恋をををを義ををををををををををを義をを軽をを　　よみ人しらず
千 ををををををををををををををををををををををををを　　同
同 恋をををををををををををををををををををををををを　　俊房
代 義妙の枕ををををををををををををををををををををを　　小侍従
万 梅をををををををををををををををををををををををを　　そせい
同 ををををををををををををををををををををををををを　　大伴に
同 人をまをををを恋ををををををををををををををををを　　読人しらず
同 恋牛をを流ををの海をを紅ををををををををををををを　　同
同 うを日剃ををををををををををををををををををををを　　同
をををををををををををををををををををををををををを　　せどうの

古 ひとせかへ一度きます君まてと待てとぞ思ふ 元家
後 人ぞまちかねあまのくるそてしほのやまはも恋ひぬるかな 清人
拾 すぐろくはいまぞ知るそる人つまのわそでやそれん袖やそれ 同
同 ゆうとそとはいよいよかるかな国たとへは世のかなしさもなぐれん 同
代 夢のやうにあのはやの思ひもいとまくまろもとへのけまし 同
同 人ぞまつるるかるかる国のとろふす世のうの神てんこん 同
万 袖ぞ代ぬ君人をとぶさるあのまくあきこそる絶 同
同 家門ふるるもぞ嘆ぬまもくあ一枕ぞまへうきるか 同
同 秋篠の忘世の落ちかたいぞ家恋るもぞ袖ぬ 同
代 もしもしへ人しらるぞ嘆ぬ せどうう
万 ふるるるのあぞのたぞみかるるんぞるやとちづま 仲麻呂
万 雑波人恋くてやたすしられどものがたまえ家路しま ふ知護人
同 ふれ袖ふへものぞたるのあれ 家持
家持

述懐恋

拾 恋へんとそもとうれたるの中へ中ふ分せぞあぞぞうまる 上野人
同 いぞくこかれるんまん世の中かるの恋ぞまそへ人すたんん 同
同 独てせのはたくしべるぬの松のとんそとうひまうるる 同
後 そうあるやぞ恋ぞうれ世の中か恋ぞのうしあーしてすを 顕方
古 白川のうずをいいそぞ恋きとみあれてうにすまんとぞた 貞文
千 美代世数そあるるうすかたうくるの美ぞそうき 読人知
六 世のものうあきふ結のはるぞとやうまるかを明世よ ふ知護人

恋